

インターネット俳誌/SEIGETU

清 月

6月中の出句 19名 延べ670句



第167号 平成26年 6月

清月俳句会の閉会予定時期（二年後）について

ゆたか

当インターネット俳句会は、私の退職後の平成十二年六月に当時参加していました同人俳句会の付置組織として発足し、その後、平成十四年六月に独立し清月俳句会と改称して今日に至っているものです。

この度、私の体力の衰えなどと清月俳句会の行く末を考えましたとき、私が喜寿を迎えます平成二十八年六月末日をもって当会を閉会といたたく思います。

なお清月句会の閉会後も続く限り、それまでの当会関連ページをインターネット上に残しておきますとともに、私自身の月例俳句の発表・清月俳壇（句集など）の継続・清月俳句歳時記の改訂作業などを推進して参りたいと思っております。

会員の皆様におかれましては、当会の閉鎖に伴い作句を中止されることなく続けていただきたいと思っております。

俳句は、読者があつてこそ成立する座の文学です。俳句を続けるのには、いずれかの俳句会に参加する必要があります。

現在、当会以外の俳句会に参加されておられない方は、句会などの行事にいつでも参加できます居住地近くの俳句会に参加して俳句を続けていただきたいものだと思います。

閉会まで、あと二年ではありますが、清月俳句会を宜しく願っています。

平成二十六年六月

大阪清月庵にて

目次

近詠	ゆたか	2
雑詠選	ゆたか	3
寸感	ゆたか	10
互選集計結果報告	事務局	11
互選一〇句の披講	幹夫 恵山 伸義 睦夫 しゆじ よし子 省司 允孝 宏一 美琴	
順一		

近詠

野田ゆたか

限りある命惜しめよ火取虫
蠟涙の一灯ほのと五月闇
青鷺のつくねんと佇ち身じろかず
人生の遅れ戻せず時計草
梅雨入雲重く垂れゐて生駒山

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

筒 抜 け の 噂 話 や 籠 枕 岡山 橋本幹夫
 自 慢 げ に 百 足 退 治 の 咄 かな 同
 一 心 に 君 影 草 の 香 り け り 同
 紫 陽 花 の 一 葩 ごと に 雨 の 色 同
 夏 至 の 夜 の 銅 鑼 泣 き じ や く る 大 洗 同
 馬 鈴 薯 の 花 果 て し な き 大 地 かな 千葉 清水恵山
 田 水 張 る 千 枚 田 み な 山 映 し 同
 子 鳥 や 寄 れ ば 睨 み て 親 鳥 同
 咲 き 誇 る 浜 昼 顔 や 九 十 九 里 同
 蝮 除 け ゲ ー ト ル 巻 い て 粗 朶 を 刈 る 同

川 沿 ひ に 続 く 札 所 や 夕 河 鹿 岐阜 石崎そうびん
 三 川 を 自 在 に 行 き 来 夏 つ ば め 同
 廃 屋 は む か し 呉 服 屋 桐 の 花 同
 雨 空 を 明 る く し た り 山 法 師 同
 石 楠 花 に 色 づ く 風 や 室 生 川 同
 そ ぞ ろ 歩 の 疏 水 の 小 径 若 葉 風 吹田 池下よし子
 竹 皮 を 脱 ぐ 抜 け 道 の 秘 密 め く 同
 ぼ た 山 の い ま は 緑 に 遠 賀 川 同
 か へ り み る 泰 山 木 の 花 白 し 同
 推 敲 の ま た も 推 敲 明 易 き 同
 片 敷 き の 空 に 重 た き 梅 雨 の 月 島根 白根鈴音
 短 夜 の 夢 の つ づ き を 蔵 い け り 同

不器用に箸に掛るや冷奴 島根 白根鈴音
 潮の香を浴みて十神の夏木立 同 同
 厄除の願ひあまたや嘉祥菓子 同 同
 光跡に光跡かさね恋蛩 大阪 木村宏一
 黒南風や暗峠歩を速め 同 同
 蝸牛何処に急ぐにわか雨 同 同
 河鹿鳴く枕を抱いて聞く夜かな 同 同
 窓開けて引き込む闇や青葉木菟 同 同
 大阿蘇に赤牛の散る夏野かな 千葉 田村公平
 大輪が名札を隠す花菖蒲 同 同
 さつぱ船蓮の浮葉を分けて入る 同 同
 カーテンに漏れ来る光明易し 同 同

地ビールを汲みて二人の旅路かな 千葉 田村公平
 若竹の風遊ばせてゐる梢 鳥取 瀬尾睦夫
 水無月の息災願ふ小豆かな 同 同
 ひそと咲き散りて気づくや柿の花 同 同
 その名でも妍を競ふや花菖蒲 同 同
 一步ごとと違ふ紫菖蒲園 同 同
 磯の香のただよふ渚星涼し 三重 後藤允孝
 夏草や隠れて見えぬ石地蔵 同 同
 風紋や浜昼顔の花言葉 同 同
 暗がりや抜けて木漏日半夏生 同 同
 草笛の吹いて子どもら塾帰り 同 同
 山梔子の匂へる花の夕明り 大阪 山縣伸義

黒南風や沖の白波暮れ残る 大阪山縣伸義
 夕闇の蜜柑の花の香にむせぶ 同
 あぢさゐりに一雨欲しき花の寺 同
 日の射して水に浮き立つ杜若 同
 紫陽花や天より受くる色模様 三重山口美琴
 日差し出てひととき遊ぶ梅雨の蝶 同
 麦の秋農協まつり盛大に 同
 山川と天地の名あり花菖蒲 同
 湯上りにひと風欲しき夏の夜 同
 父の日や卓に残れる鯛の骨 愛知足立山溪
 看護婦の笑顔まぶしやさくらんぼ 同
 箒目の著き境内青葉風 同

江ノ電や右に左に七変化 愛知足立山溪
 早朝の庭で一声時鳥 千葉筒井省司
 郭公の声降るダムの遊歩道 同
 父の日や昨日の続き庭手入れ 同
 白い花朽ちて梔子残り香に 同
 クールビズ緑の風を孕ませて 静岡渡邊春生
 まつすぐに夜店の町を抜けて来し 同
 蛍の夜声密やかにかはしけり 同
 梅雨寒し畑を見回る日課かな 同
 がうがうと膨らむ闇や牛蛙 大阪森戸しゆじ
 パレットやあぢさゐの色決めかねて 同
 でで虫は家の重さに耐へて這ふ 愛知駒田暉風

今日からは油蟬聞く日々となり 愛知 石川順一
桑の花 海星のやうな爪伸ばし 山梨 志村万香

寸感

ゆたか

筒抜けの噂話や籠枕 幹夫

冷房設備が普及した現在も風通しがよく涼しいことから使用されている籠枕。

空洞の籠枕を比喻しての噂話の筒抜けがユーモラスであり、その情景が俳趣として心地よく広がってくる。

馬鈴薯の花果てしなき大地かな 恵山

北海道の広大な花期の馬鈴薯畑の景が目に見えて美しく浮かびます。

馬鈴薯の花のころは、耕作農家の農閑期でしょうか。

広大な景が見事に読み取られている。

川沿ひに続く札所や夕河鹿 そうびん
清流域に棲むという河鹿。

徳島市内の川に沿った河鹿の声を聞くことが出来る徒歩遍路古道でしょうか。

その日の最後に打つ札所近くで聞く河鹿の声に癒やされている作者が見えます。

そぞろ歩の疏水の小径若葉風 よし子

俳句では、京都市左京区内にある永観堂付近から銀閣寺付近へと続く琵琶湖疏水沿いの哲学の小道の桜並木関連の景がよく詠まれます。

小径の若葉風が上手に詠まれている。

片敷きの空に重たき梅雨の月 鈴音

梅雨の月は暈が取り巻いていることが多く見るからに重たげに見える。

片敷と梅雨の月と相俟って、独り寝の物憂いさが伝わってきます。

季題の「梅雨の月」がよく利いている。

光跡に光跡かさね恋蛍 宏一

蛍の光の筋が入り混じっている中から一對の光跡を目で追っている作者。

強い光を出しているのが雄でしょうか。目にした蛍の愛に想いを馳せる作者。

蛍の景が無駄なく上手に詠まれている。

互選一〇句の集計結果 互選者十一人

高点句

五点	紫陽花や天より受くる色模様	山口美琴
四点	郭公の声降るダムの遊歩道	筒井省司
三点	田水張る千枚田みな山映し	清水恵山
同	馬鈴薯の花果てしなき大地かな	同
同	クルルビズ緑の風を孕ませて	渡辺春生
同	パレットやあぢさゐの色決めかねて	森戸しゅじ
同	磯の香のただよふ渚星涼し	後藤允孝
同	黒南風や沖の白波暮れ残る	山縣伸義
同	若竹に風遊ばせてゐる梢	瀬尾睦夫
同	大輪が名札を隠す花菖蒲	田村公平

三点	吊忍揺れて小さき風生まれ	石崎そうびん
同	筒抜けの噂話や籠枕	橋本幹夫
同	母偲ぶ琥珀色なる梅酒かな	木村宏一

高点者

一〇点	石崎そうびん
同	田村公平
同	清水恵山

互選一〇句 橋本幹夫選

郭公の声降るダムの遊歩道 筒井省司
黒南風や沖の白波暮れ残る 山縣伸義
父の日や鯛の刺身と吟醸酒 足立山溪
サングラスかけて僧侶の黒靴 池下よし子
夕影を抱く白蓮眩しかり 後藤允孝
辣韭とカレーの匂ふ膳に着く 清水恵山
若竹の風遊ばせてゐる梢 瀬尾睦夫
雨傘の絵柄浮き出て梅雨に入る 山口美琴
万緑に丹塗りのひさし羽ばたきぬ 木村宏一
焼酎を夕暮に飲む独りかな 石川順一

互選一〇句 清水恵山選

パレットやあぢさゐの色決めかねて 森戸しゆじ
泰山木高さに秘仏花の芯 木村宏一
山繭や安曇野どこも水の音 石崎そうびん
土砂降りの雨六月の夜明前 橋本幹夫
紫陽花の球を太らす粉糠雨 駒田暉風
極まりて天道虫の飛び立てり 渡邊春夫
夕星やくちなし匂ふ坂の町 池下よし子
紫陽花や天より受くる色模様 山口美琴
磯の香のただよふ渚星涼し 後藤允孝
追われ来し自刃跡とや草茂る 田村公平

互選一〇句 森戸しゆじ選

蝸牛何処に急ぐにはか雨 木村宏一
でで虫は家の重さに耐へて這ふ 駒田暉風
川沿ひに続く札所や夕河鹿 石崎そうびん
筒抜けの噂話や籠枕 橋本幹夫
そぞろ歩の疎水の小径若葉風 池下よし子
紫陽花や天より受くる色模様 山口美琴
田水張る千枚田みな山映し 清水恵山
大阿蘇に赤牛の散る夏野かな 田村公平
黒南風や沖の白波暮れ残る 山縣伸義
若竹の風遊ばせてゐる梢 瀬尾睦夫

互選一〇句 池下よし子選

がうがうと膨らむ闇や牛蛙 森戸しゆじ
蝸牛何処に急ぐにわか雨 木村宏一
三川を自在に行き来夏つばめ 石崎そうびん
筒抜けの噂話や籠枕 橋本幹夫
磯の香のただよふ渚星涼し 後藤允孝
父の日や卓に残れる鯛の骨 足立山溪
馬鈴薯の花果てしなき大地かな 清水恵山
大阿蘇に赤牛の散る夏野かな 田村公平
まつすぐに夜店の町を抜けて来し 渡邊春生
若竹に風遊ばせてゐる梢 瀬尾睦夫

互選一〇句 山縣伸義選

尼寺へ狭き磴なり額の花 石崎そうびん
吊忍揺れて小さき風生まれ 石崎そうびん
大掃除したかの如き梅雨晴間 田村公平
菖蒲園段差に弱き車椅子 田村公平
母偲ぶ琥珀色なる梅酒かな 木村宏一
眠る子にそつと被せる夏羽織 橋本幹夫
初生りの胡瓜をぶぐに躊躇ひし 池下よし子
馬鈴薯の花果てしなき大地かな 清水恵山
梅雨曇何はせずとも庭手入れ 筒井省司
赤んぼの寝かされてゐる夏座敷 瀬尾睦夫

互選一〇句 瀬尾睦夫選

吊忍揺れて小さき風生まれ 石崎そうびん
制服の白のまばゆき更衣 池下よし子
外に出てて肌の息する夏の朝 山縣伸義
田をあがりおしへられたる足の蛭 清水恵山
万緑に丹塗りのひさし羽ばたきぬ 木村宏一
大輪が名札を隠す花菖蒲 田村公平
パレットやあぢさゐの色決めかねて 森戸しゆじ
紫陽花や天より受くる色模様 山口美琴
鬼灯の花や罪なき夜雨来る 橋本幹夫
梅雨曇羽黒蜻蛉をじつと見る 石川順一

互選一〇句 筒井省司選

紫陽花や天から受くる色模様 山口美琴
母偲ぶ琥珀色なる梅酒かな 木村宏一
ぼた山のいまは緑に遠賀川 池下よし子
田水張る千枚田みな山映し 清水恵山
クールビズ緑の風を孕ませて 渡邊春生
雨の木場浮かぶ丸太に蝸牛 石崎そうびん
父の日や鯛の刺身に吟醸酒 足立山溪
焼酎を夕暮れに飲む独りかな 石川順一
磯の香のただよふ渚星涼し 後藤允孝
馬鈴薯の花果てしなき大地かな 清水恵山

互選一〇句 後藤允孝選

黒南風や暗峠歩を速め 木村宏一
三川を自在に行き来夏つばめ 石崎そうびん
早乙女の束ねし朝の黒き髪 橋本幹夫
箒目の著き境内青葉風 足立山溪
ぼた山のいまは緑に遠賀川 池下よし子
梅雨晴間園庭に兎ら声弾む 山口美琴
畦道に燃えて華やぐ虫篝 清水恵山
郭公の声降るダムの遊歩道 筒井省司
大輪が名札を隠す花菖蒲 田村公平
クールビズ緑の風を孕ませて 渡邊春生

互選一〇句

木村宏一選

がうがうと膨らむ闇や牛蛙 森戸しゆじ
 土砂降りの雨六月の夜明前 橋本幹夫
 父の日や卓に残れる鯛の骨 足立山溪
 雨傘の絵柄浮き出て梅雨に入る 山口美琴
 畔に穴あけて豆植う手際かな 清水恵山
 郭公の声降るダムの遊歩道 筒井省司
 大輪が名札を隠す花菖蒲 田村公平
 クールビズ緑の風を孕ませて 渡邊春生
 夏草や隠れて見えぬ石地蔵 後藤允孝
 黒南風や沖の白波暮れ残る 山縣伸義

互選一〇句

山口美琴選

パレットやあぢさゐの色決めかねて 森戸しゆじ
 母偲ぶ琥珀色なる梅酒かな 木村宏一
 吊忍揺れて小さき風生まれ 石崎そうびん
 筒抜けの噂話や籠枕 橋本幹夫
 夕星やくちなし句ふ坂の町 池下よし子
 田水張る千枚田みな山映す 清水恵山
 郭公の声降るダムの遊歩道 筒井省司
 風紋や浜昼顔の花言葉 後藤允孝
 山梔子の匂へる花の夕明り 山縣伸義
 若竹の風遊ばせてゐる梢 瀬尾睦夫

互選一〇句

石川順一選

短夜の読経の中に日の出待つ 田村公平
 薄墨を天に敷き詰め梅雨に入る 白根鈴音
 高床の家取り囲む夏木立 田村公平
 あぢさいや浮気心の長電話 瀬尾睦夫
 初採りの胡瓜にもろみひとり酒 筒井省司
 緑陰にすずめと鳩と乳母車 池下よし子
 水替えて色蘇る水中花 石崎そうびん
 値踏みして両手に重き西瓜かな 瀬尾睦夫
 長雨に掃いても溜まる竹落葉 志村万香
 青梅雨や赤き農小屋ひっそりと 山口美琴

インターネット俳句 清月
 第166号
 平成26年6月中の出句から

発行
 平成26年 7月20日

主宰 兼 編集
 野田ゆたか

発行所
 枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
<https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm>